動詞の意味と構文の意味

ー「出る」の多義性に関する構文文法的アプローチ ー

伊藤　健人

キーワード：構文文法，動詞の多義性，構文の多義性，構文間のネットワーク

1　はじめに

本稿は、動詞（語彙レベル）の意味特性によると考えられている多義性が「構文の意味」によってもたらされているとする「構文文法 construction grammar (Fillmore, Kay & O'Connor 1988, Goldberg 1995など)」のアプローチにより、日本語動詞「出る」の多義性を分析するものである。

単に動詞（語彙）の“多義性”によってもたらされているようにみえる様ざまな解釈を注意深く観察してみると、実は、文中の他の要素に大きく影響されているという例が数多くある。辞書等の記述に見られる“多義”的な動詞の例文には、当該の動詞の要求するいわゆる項（argument）や、付加的要素（adjunct）及び副詞的要素による制約が認められ、用いられる文における格パターン（例えば、「ーガーニ」「ーガーカラ」など）に違いが見られることが多い。我われは、意識的、あるいは、無意識的にこのような観点から文レベルの多義性を認識していると言える。

国広(1997)は、多義語項目の記述は、国語辞書の記述で最も大きな問題であるとし、以下のように述べている。

> 辞書によって多義の示し方が異なる理由はいろいろと考えられる。主なものとして、まず多義を区別するときの精度の違いがある。文脈の影響を受けて違って見える語義を細かく追及していけば、多義はいくらでも数を増す。また、多義を区別するときの意味的な基準の取り方の違いということもある。･･･（中略）･･･基本義とその派生義の扱い方にも違いがあり得る。基本義ごとにその派生義を配列するか、異なった基本義からの派生義をひとまとめにして末尾に持っていくか、というようなことである。さらに、文型の違いに基づいて配列する方法もある。各語の意味的な性質に従って配列法を変えた方がよいということも考えられる。問題は複雑である。（国広1997: 174）

多義性に関する考察は、当該の語を含む句、或いは、文を対象として行うのが、一般的、かつ、有効な方法であろう。ある言語表現（語はもちろん、句、文レベルでも）における多義性は、特定の文脈や状況の中で認められる。つまり、当該の要素と他の要素との関わりが重要なのである。特に、動詞

については、統語的、意味的にも文の中心要素であるため、それが要求する格成分（項や付加的要素）、副詞的成分、いわゆる助動詞や補助動詞といった、ボイス、テンス、アスペクト、モーダル等に関わる要素など、多くの要素との関係が問題となる。従って、この種の言語研究では、コロケーション(collocation)、や選択制限(select ional restriction)といった概念が広く用いられている。

さて、ここで注意しなければならないのは、多義語とされるものが持つ多義性は、果たして、その語のみによってもたらされるのかということである。例えば、日本語辞書（『大辞林－第二版－』三省堂）では、「出る」という動詞に30もの語義（意味・用法）の記述とその例文が挙がっている(1)。以下にその中の５つを挙げる（例文末の数字は『大辞林－第二版－』のもの）。

『大辞林－第二版－』三省堂における「出る」の語義（抜粋）

a.それまで社会的に所属していたところから去る。「学校を出てから10年たった」(3)

b.仕事や学業などの活動をするために行く。 「店に出る」「会社に出る」(4)

c.集まりなどに出席・参加する。 「同窓会に出る」「ゴルフのコンペに出る」(7)

d.物が移動して中から外、または人の目に見える所に現れる。「煙突から煙が出る」(10)

e.ある現象や事態が発生する。起きる。「夕方になって風が出てきた」「咳が出る」(25)

（『大辞林-第二版-』三省堂より）

このような例から見ても、「出る」は多義語であるということになるが、注意して見ると、これらの語義は特定の“格パターン”と結びついていることがわかる。「それまで社会的に所属していたところから去る」という解釈は、「学校を出る」のように「－ガ－ヲ」という格パターンに現れる。同様に、「仕事や学業などの活動をするために行く」と「集まりなどに出席・参加する」は、［－ガ－ニ］という格パターンに見られる。また、「物が移動して中から外、または人の目に見える所に現れる」は、主に［－ガ－カラ］、「ある現象や事態が発生する。起きる」は、主に［－ガ］という格パターンで用いられることが多い。つまり、一般的に言われる動詞の多義性とは、それ自身の持つ語彙的な特性によってのみ表されるのではなく、それが用いられる格パターン（構文）も重要な役割を果たしているのである。

本稿では、上の国広(1997)で多義語における「基本義とその派生義の扱い方」の一例として挙げられている「文型の違いに基づいて配列する方法」を採って、“複雑な問題”である多義性について考えたい。具体的には、動詞の多義性と構文の多義性との関係について、Goldberg(1995)などで提唱されている「構文文法(Construction grammar)」の考え方を用いて考察する。以下では、本稿の理論的拠り所となる構文文法（構文理論）を概観する。

2　構文文法の概観

2.1　構文文法における構文の捉え方

一般的、伝統的な意味では「構文」とは、単に類似文の集合を統語的な型から整理したリストであり、記述的・学習的な便宜から記憶・記録されるべきもので、特に説明の必要のない事実と考えられ

てきた（吉村2002: 75）。しかし、認知言語学でいう「構文」とは、「特定の意味と形式のペアから成る、文法上の構成単位」であり、概略、以下のような性質を持つものである。

「構文」：意味と形式との結びつきが１つのカテゴリーとして実現されたもので、典型と拡張の幅を有し、相互に関わりを持つ有意なまとまり（吉村2002: 75）

つまり、構文も語彙項目と同様に多義性を持ち、拡張の幅を持つと考えられるということである。

このような構文の意味を認める必要性は以下のような例から裏付けられる。Goldberg(1995）によれば、架空の動詞*topmaze*を含む(1)の例文を用いて、言語学とはまったく関わりがない人々に対して、この文がどのような意味に解釈できるかということを聞くという実験を行ったところ、それらの人々は、「手紙を*topmaze*という手段か様態か何かで移送する」という解釈を行おうとするという結果が得られたという。

(1) He topmazed her his letter. （Goldberg1995: 35; 19）

また、日本語でも、「読む」や「作る」という動詞の基本的な語義にはない“＜第三者に対して＞＜発せられた音声や作成されたものを＞＜与える＞”といった意味が(2)のような文では表される。

(2) a. 太郎は、毎晩娘に『白雪姫』を読んでいるので、最初から終わりまで暗唱できるそうだ。
b. 花子は、毎朝息子に弁当を作ってから、仕事に出かける。

このような解釈は、「ＸガＹニＺを *“与える”*」といった格パターンを持つ構文の抽象度の高い *“与える”* の部分に「読む」や「作る」という具体性の高い動詞が用いられることによって表現される「構文的意味」によるものである。

このような流れを汲む構文文法[(2)]のもっとも大きな利点は、多義に関して動詞に過度の負担を強いる必要がなくなるということである。例えば、Xという動詞が使われているA、B、C、Dという４つの文が、それぞれ異なる解釈を持つ場合、従来はその動詞の多義性、即ち、X_A、X_B、X_C、X_Dという４つの多義を認めるという観点から説明するという方法が採られていた。しかし、このような方法では、冒頭の国広(1997)の言を借りれば、「文脈の影響を受けて違って見える語義を細かく追及していけば、多義はいくらでも数を増す」ということになってしまうのである。

以上のような理由から、構文文法では、文レベルの多義性の要因を動詞に求めるのではなく、構文に求めるという方法を採るのである。

2.2 「動詞の意味」と「構文の意味」

上で概観したように構文文法では構文の意味が重視されるが、では、この理論における動詞の意味はどのように扱われるのであろうか。

早瀬(2002)は、構文と動詞の関係という観点から、Goldbergの構文文法の特徴を以下のようにまとめている。

(3)Goldbergの構文文法の特徴（早瀬2002）

1. 構文は動詞とは独立した意味を持つ
2. 構文の持つ骨格的かつ抽象的な意味を、動詞の意味によって具現化する
3. 動詞の意味と構文の意味とが融合されて、表現全体としての意味が得られる
4. 動詞の意味とはフレーム意味論的な豊かな情報を含んだ単一の意味である

これに対し、当然のことながら、動詞の意味の多義を認める立場をとる研究者からの批判が噴出した。その批判は、主に「個別の動詞の特異性が、構文だけでは説明できない」ということに収束できる（早瀬2002: 61）。

例えば、岩田(2001)は、「Goldberg(1995)では、構文理論の独自性を主張するためにかなり「構文」が強調されていた。その後「構文」自体の存在はかなり認められてきたが、次の段階として「構文」が真に果たす役割を検討する作業が必要になってくる。」として、構文文法ではそれが抑えられるようになった動詞の果たす役割の大きさを主張している（岩田2001: 534-5）。

また、松本(2002)では、「Goldbergが論じている以上に構文の意味の役割を弱く考え、動詞の意味を豊かに考える必要がある」と主張している(松本2002: 187)。

しかし、「構文への過剰な偏重を是正するため、動詞の意味を詳細に分析するべきである」という主張は一見至極まっとうに見えて、実は気をつける必要がある。というのも、ある特定の動詞について検討し、その意味について語る場合、それが本当にその動詞の単独の意味といえるのかどうか、という問題が常につきまとうからである（早瀬2002: 61）。この問題について、早瀬(2002)は、動詞の意味を検討する際には、必ずその動詞を伴った具体的な文レベルで行われており、「動詞の意味」と考えられているものが、純粋に動詞そのものの意味なのか、それとも本当は構文の意味を具体化したものなのか、簡単に分けられるものではないと述べている。そして、早瀬(2002)は、「動詞の意味を詳細に記述分析」することは、実はその動詞を用いた具体的文の意味の記述、つまり、構文の特殊化・具体化されたレベルの記述と連続しているとし、動詞の（フレーム）意味論を重視することは、動詞の意味記述をする際に構文の意味を重視する（つまり構文に言及する）ということと、ほぼ等価なのではないかと述べている（早瀬2002: 61-62）。

本稿でも、早瀬(2002)の立場を支持する。他の動詞との関係を考慮しない個別の動詞の詳細な意味記述は孤立的であり、また、いたずらに多義を増やしたり、アドホックな分析になるといった恐れがある。例えば、「出る」には、「住宅地にクマが出た（→出没した）。」「彼はその組織を出た（→離れた）。」「その県からは多くの芸術家が出た（→生まれた）。」などの多義が認められるが、これらの多義の記述には、他の動詞（「出没する／離れる／生まれる」など）が用いられる。つまり、多義とは、他の関連する意味との比較において捉えられるものであり、相対的に考える必要があるといえる。注目すべきは、当該の動詞が意味的に関連を持つ他の動詞とともに有意味なカテゴリーを形成しているということである。そのカテゴリーに共通するものこそ「構文的な意味」なのである。個々の動詞の意味を超えた構文の意味を仮定し、その構文の意味や形式を考察することは、辞書の記述や言語教育の観点からも有用な方法であるといえよう。

2.3　格パターンに基づいた構文の考察

構文とは、特定の形式と特定の意味からなる「意味と形式の対応物（form-meaning correspondence）」である[3]。このように考えた場合、特定の形式とは、どのようなものなのだろうか。この“形式”には、文法関係はもとより、いわゆる項の意味役割、さらに、それぞれの要素のコロケーションなどさまざまな要素が含まれうる。問題は、どこに中心を置くか、どこで折り合いをつけるかということであろう。本稿では、［－ガ－ニ］、［－ガ－カラ］といった格パターンが形式の中心的要素と考える。以下にその理由を述べる。

膠着語でＳＯＶ言語である日本語では、格助詞が文構造に形態的に現れるため、ガ格、ヲ格、ニ格といった格助詞の組み合わせ、すなわち、格パターンの類型が種々の構文の意味と密接に関わっている[4]。よく似たフレームを持つ動詞（例えば、「去る」「離れる」「脱する」「出る」など）が一定の有意味なカテゴリーを形成し、多くの場合そのカテゴリーに属する種々の動詞が同様の格パターン（［－ガ－カラ　V］や［－ガ－ヲ　V］）を持つというのは単なる偶然ではないといえよう。つまり、格パターンという形式が構文的な意味と結びついて、事態の捉え方に関わる構文スキーマを形成しているのである。

以下では、日本語動詞「出る」の事例研究により、この主張の妥当性を検証したい。

3　格パターンに基づいた構文的意味　－「出る」の事例研究－

ここでは、格パターンに基づいた構文の研究の一例として、いわゆる多義語の代表例である日本語動詞「出る」について考察する[5]。以下、まず3.1で「出る」の多義について検討し、3.2でその多義が構文の意味によるものであることを検証する。さらに、3.3では、「出る」の多義に関わる構文がどのようなネットワークを形成しているかを考えたい。

3.1　「出る」の多義性について

本稿では、「出る」の多義を大きく４タイプ、すなわち、《a 起点から着点への位置変化 =(4) 》、《b 出現 =(8) 》、《c 発生 =(9) 》、《d 離脱・退去 =(10) 》に分類する。さらに、《a》に《a-1 起点重視の位置変化 ＝(5) (6) 》、及び、《a-2 着点重視の位置変化 =(7)》の下位類を認める。

(4)　地震に驚いた人々が部屋から廊下に出た。　→《a位置変化》

(5)　a. 太郎が風呂から出た。　→《a-1起点重視の位置変化》

　　b. 列車がトンネルから出た。　→《a-1起点重視の位置変化》

(6)　東京行きの電車は３番ホームから出ます。　→《a-1起点重視の位置変化》

(7)　a.この道を行けば駅に出る。　→《a-2着点重視の位置変化》

　　b. 会議に出る。 →《a-2着点重視の位置変化》

(8)　ゴジラがニューヨークに出た。　→《b出現》

(9)　台所から火が出た。　→《c発生》

(10) 太郎は住み慣れた街を出た。　　→《d離脱・退去》

《a 起点から着点への位置変化》は、純粋にＸがＹからＺに位置を変える（移動する）ものである。これには、《a-1 起点重視の位置変化》と《a-2 着点重視の位置変化》の下位類が認められる。《a-1 起点重視の位置変化》とは、着点が想定できないわけではないが、ほとんど意識されず、起点からの移動が中心的に意識される（プロファイルされる）ものである。(5')のように着点が文中に現れても特に有意味な差異は生じず、非文にはならないがリダンダントなすわりの悪い文となるか、より《a》のような位置変化の意味合いが強い文となる。

(5') a. ??太郎が風呂から *外に* 出た。
b. ??列車がトンネルから *外に* 出た。

また、(6)は、《a-1》のなかでも、特に「出発」の意味合いが強いものである。この解釈を持つ文では、(6')のように、もはや着点は文中に現れることができない。

(6') *東京行きの電車は３番ホームから *東京に* 出ます。

《a-2 着点重視の位置変化》は、着点への移動が強く意識されるものである。この解釈を受ける文では、《a-1》とは逆に、着点がプロファイルされ、起点が現れることができない。

(7') a. *この道を行けば *ここから* 駅に出る。
b. **教務課から* 会議に出る。

この《a-2着点重視の位置変化》は、《b 出現》と関係が深い。《b 出現》は、おおむね“内部に隠れていたものが外に姿を現す”というような意味であり、(8)のように、文中に着点を許すものから、「ゴジラ／お化け／月／クマが出た」のように、着点が意識されないものまで、幅広くみられる。ただし、注意しなければならないのは、文中に着点が現れないからといっても、《c 発生》とは大きな隔たりがあるということである。《c 発生》も、《b 出現》と同様に「ーガ Ｖ」という形式で用いられることが多い。しかし、《b 出現》が“着点を重視する”のに対し、《c 発生》は、“起点を重視する”のである。

(8') a. ゴジラが φ 出た。 →《b 出現》
b. ゴジラが *ニューヨークに* 出た。
c. */??ゴジラが*東京から* 出た。
(9') a. 火が φ 出た。　　→《c 発生》
b. 火が *台所から* 出た。
c. */??火が *101号室に* 出た。

(8')(9')の比較から、《b 出現》は“着点を重視する”ものであり、《c 発生》は“起点を重視する”ものであるということがいえる。

最後に、《d 離脱・退去》について検討するが、これは、《a-1 起点重視の位置変化》と関係が深

く、着点のニ格をとることができないという特徴を持つ。しかし、最も大きな特徴は、文中の起点的要素に空間的なものだけではなく、組織や団体などの非空間的な意味を持つものが許されるということと、その格表示がカラ格と同様にヲ格でも示されるということである。（例文はいずれも『佐賀新聞』佐賀新聞記事データベース(http://www.saga-s.co.jp/pubt2002/ShinDB/）より）

(10')a. この五年間、群れで生まれ育った五匹が次々にボスに就任した。いずれも高齢の十代後半。力が強い母猿の保護下で、**群れを出る**ことなく順送りで、ボスの座を射止めたらしい。

b. 加藤紘一さんは自分が自民党本流だと思っているから、当初から**党を出る**つもりはなかった。

c. 小沢氏も「**連立を出る**余地は残さんとな…」とつぶやいた、という。

d. **ダイエーを出る**とき、みんなに日本シリーズで会おうと言ってきたから。

(10'）は、「群れ／党／連立（政権）／ダイエー（プロ野球チーム）」のようにいずれも組織や団体を離れるという意味のものである。このように、《d 離脱・退去》は、空間的な起点だけでなく、非空間的な起点から離れるという解釈のものである。

以下では、ここでの「出る」の多義の観察を踏まえて、この多義が構文の意味によるものであることを検証する。

3.2 動詞「出る」が関わる構文

上の3.1で大別した「出る」の多義は、実は、そのまま構文の意味と深く関わっている。すなわち、動詞「出る」が持つ多義は、**①位置変化構文、②出現構文、③発生構文、④離脱・退去構文**の中で用いられることにより生じるものである。以下、それぞれの構文について検討する。

3.2.1 ①【位置変化構文】

この構文は、以下のような性質を持つものである。

【位置変化構文】	
基本的な意味	《起点から着点へNP1の位置が変化する》
格パターン	［**NP1ガ** NP2カラ NP3ニ V］　*V→出る、移る、動く、移動する・・・*
構文的な制約	プロファイルされるのはNP1のみで、NP2, NP3は任意の要素。

【位置変化構文】は、NP1の《起点から着点へNP1の位置が変化する》という基本的な意味を持つ。この構文は、［**NP1ガ** NP2カラ NP3ニ V］という格パターンを基本的な形式とし、Vには「出る／移る／動く／移動する」などの動詞が用いられる。３つのNPの中で、意味的に必須の（プロファイルされる）要素はNP1だけであり、「NP2カラ」と「NP3ニ」は特に現れなくてもよい（プロファ

イルされない）。また、起点の「NP2カラ」と着点の「NP3ニ」は、それぞれ、〈source〉、〈goal〉といった意味役割を担うが、これらが、具体的なもの（場所）から抽象的なもの（状態）になると、【状態変化構文（結果構文）】となる。これは、【位置変化構文】からの比喩的な拡張である。

(11) a. 【位置変化構文】地震に驚いた人々が部屋から廊下に出た。(=4)
b. 【状態変化構文】信号が赤から青に｛変わった／変化した／なった｝。

さらに、位置変化構文は《起点から着点へNP1の位置が変化する》という基本的な意味が、起点を重視するか、着点を重視するかで、2方向に拡張していく。それは《起点から着点への位置変化》という基本的な意味のうち、起点を重視する【起点的-位置変化構文】と、着点を重視する【着点的-位置変化構文】である。

【起点的-位置変化構文】は、上で見た(5')(6')からわかるように、着点は問題にならず、起点のみがプロファイルされているものである。

(12)【起点的-位置変化構文】太郎がその建物から｛出た／離れた／去った｝。

この【起点的-位置変化構文】を経由する構文の拡張は多岐にわたる。まず、意味的に近いものには、【“出発”構文】がある。これは、上の(6')から明らかなように、着点を現す要素と共起しないという構文的な制約が認められる。これは、Goldberg(1995)での「具体例のリンク(Instance link)」に相当するものであろう（Goldberg1995: 73）。これについては、3.3で述べる。

(13)【“出発”構文】東京行きの電車は３番ホームから｛出る／出発する／発進する｝。

また、【起点的-位置変化構文】は、【消滅構文】、【分離構文】との類似性が認められる。【分離構文】は、［<u>NP1ガ</u> NP2カラＶ｛外れる／とれる／はがれる｝］という格パターンで、密着していたNP1とNP2の距離が広がることを、もとあったNP2からNP1が遠ざかる動きに見立てている。また、【消滅構文】は、［<u>NP1ガ</u> NP2カラＶ｛消える／なくなる／うせる｝］という格パターンで、NP1がもとあった（いた）NP2から消滅するという意味を持つ。ただし、この２つは、「出る」の多義とは深く関わらないので、これ以上触れないこととする。

さらに、【起点的-位置変化構文】は、【発生構文】と【離脱・退去構文】へも拡張するが、これらはそれぞれ、3.2.3と3.2.4で触れることとする。

一方、【着点的-位置変化構文】は、上でみた(7')からわかるように、起点は問題ならず、着点のみがプロファイルされているものである。

(14)【着点的-位置変化構文】この道を行けば駅に｛出る／着く／到着する／ぶつかる｝。

この【着点的-位置変化構文】は、移動の意味が薄れ、状態変化の解釈が強まることで、【出現構文】へと拡張していく。次の3.2.2では、この構文について述べる。

3.2.2 ②【出現構文】

【出現構文】	
基本的な意味	《見えないところにあったものや隠れていたものが現れる》
格パターン	［**NP1ガ** NP2ニ V］ *V→出る／出現する／現れる・・・*
構文的な制約	プロファイルされるのはNP1のみで、NP2,は任意の要素。

【出現構文】は、【着点的-位置変化構文】からの拡張であり、移動の意味が薄れ、見えない状態から見える状態への変化が焦点になるという点で有意味な差が認められる。

(15)【出現構文】｛ゴジラ／お化け／月／クマ｝がある場所に｛出た／出現した／現れた｝。

この【出現構文】は、着点のニ格名詞句が出来事を表す名詞（event noun）をとることで、【“出席・出場”構文】へと拡張していく。この場合、NP1は意図的な行為を行う主体〈agent〉でなければならず、また、出来事名詞のNP2もプロファイルされる。

(16)【“出席・出場”構文】太郎が｛会議／試合／選挙｝に｛出る／出場する／立候補する｝。

次に、【起点的-位置変化構文】からの拡張をみていこう。

3.2.3 ③【発生構文】

【発生構文】	
基本的な意味	《NP2を経由して存在しなかったNP1が発生する》
格パターン	［**NP1ガ** NP2カラ V］ *V→出る／発生する／湧き出る／生まれる・・・*
構文的な制約	NP2のヲ格は不可。［－カラ －ガ］の場合が多い。

【発生構文】が着点ではなく、起点を重視すると考える根拠はすでに(8')(9')を挙げて述べた。ここでは、この構文の格パターンの他の構文と異なる２つの特性について述べる。ひとつは、【起点的-位置変化構文】に関わる他の構文の格パターンが、［NP1ガ NP2｛カラ／ヲ｝ V］のように、カラ格とヲ格のいずれも許すのに対し、この構文はヲ格を許さないという点である。もうひとつは、この構文では、いわゆる基本語順が［NP1ガ NP2カラ V］ではなく、［NP2カラ NP1ガ V］と考えられるという点である。

(17) a. 台所から火が｛出た／発生した｝。
b. *台所を火が｛出た／発生した｝。
c. ??火が台所から｛出た／発生した｝。

(18) a.. その高校から多くのプロ野球選手が生まれた。
b. *その高校を多くのプロ野球選手が生まれた。
c. ??多くのプロ野球選手がその高校から生まれた。

このような形式の差異から考えると、この【発生構文】は【起点的-位置変化構文】からの拡張ではなく、別のカテゴリーに属する、意味的に類似した構文と考えることも可能である。この問題については、今後の課題としたい。

最後に【離脱・退去構文】について述べる。

3.2.4 ④【離脱・退去構文】

【離脱・退去構文】	
基本的な意味	《NP1がそれまで属していたNP2からところから離れる・去る》
格パターン	［**NP1ガ** NP2カラ V］ *V→出る／離れる／去る／抜ける・・・*
構文的な制約	NP2は空間的なものから組織や団体などの非空間的なものまで広く許される

この構文のNP2の意味的な特徴については、3.1の(10')で述べたが、この構文は、NP2の意味的な性質により、【空間的-離脱・退去構文】と【組織的-離脱・退去構文】へと分かれていく。

【空間的-離脱・退去構文】は、【起点的-位置変化構文】からの拡張の色彩が強い。これは、格パターンにおいて「NP2カラ」が多く用いられることからもいえる。これに対し、【組織的-離脱・退去構文】は、意味的にNP2が（群れ／党／政権／チーム）のような組織・集団となり、また、格パターンにおいても「NP2ヲ」となる点で、【起点的-位置変化構文】からやや遠い関係にある。そして、この構文の特定例には、(19)のような【“卒業・引退”構文】がある。この構文では、「NP2ヲ」のみが許され、「NP2カラ」は許されない。

(19)【“卒業・引退”構文】太郎が大学を｛出た／卒業した／やめた／退学した｝

この【“卒業・引退”構文】には、【起点的-位置変化構文】にみられる移動の意味は消え、属性の変化のみが表される。(20)はこのような特徴を裏付ける例である。

(20) a. 大学を出て社会人になる。（森田1989: 771）
b. 主人の店を出て独立する。（森田1989: 771）
c. 養成所を出てアナウンサーになった。

以上のような観察から、この４つの構文には、以下のような段階性が認められる。

【起点的-位置変化構文】［NP1ガNP2カラＶ］……位置変化（移動）
↑
【空間的-離脱・退去構文】［NP1ガNP2カラ(/ヲ）Ｖ］
【組織的-離脱・退去構文】［NP1ガNP2ヲ(/カラ）Ｖ］
↓
【“卒業・引退”構文】［NP1ガNP2ヲＶ］……状態変化

以上、「出る」に関わる代表的な構文をみてきた。次の3.3では、これらがどのようなネットワークを形成しているかについて述べる。

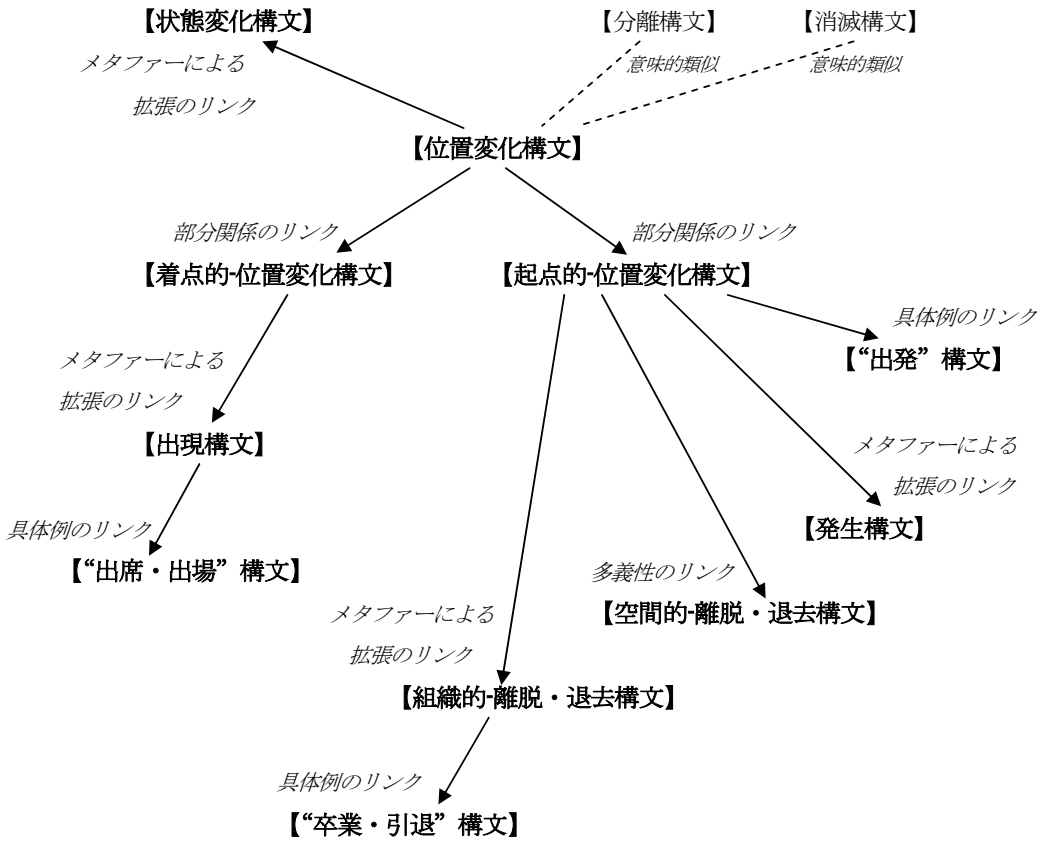
3.3　構文間のネットワーク

上でみてきた構文は散在しているのではなく、それぞれがネットワークを構造を形成している。ここでは、Goldberg(1995)の「継承リンク(inheritance link)」の考え方を用いて、上述した構文間の関係を捉えたい。Goldberg(1995)では、継承リンクとして、以下の４タイプを挙げている（Goldberg1995: Ch. 3）。

(21)　a. 多義性のリンク(Polysemy link)
→構文の基本的な意味から意味拡張を捉えるもの
b. 部分関係のリンク(Subpart link)
→ある構文と独立している他の構文を全体－部分の関係で結ぶもの
c. 具体例のリンク(Instance link)
→ある構文が他の構文の意味を具体化・特定化させた関係にあるもの
d. メタファーによる拡張のリンク(Metaphorical extension link)
→ある構文がメタファーにより拡張され別の構文に写像されているもの

この４タイプの継承リンクを用いれば、「出る」の多義に関わる構文間のネットワークは概略以下のように示すことができる。

(22)「出る」の多義に関わる構文間のネットワーク



4　結語

本稿では、構文文法的なアプローチにより、日本語動詞「出る」の多義性を分析し、それらの構文のネットワーク化を試みた。ここでの考察は、紙幅の制約もあり、「出る」の基本的な構文しか扱えず、周辺的な構文を詳細に検討することはできなかったが、いずれ稿を改めてより体系的な構文の考察とそれらのネットワーク化、さらに、格パターンで用いられる格助詞の意味的な働きについて考えたい。

注

(1)　日本語辞書における「出る」の記述は、『大辞林－第二版－』（三省堂）では30種類、『広辞苑－第五版－』（岩波書店）では、21種類の意味が挙げられている。

(2)　ただし、構文文法は、大堀（2001）の指摘するように、共通の表示形式があるわけではない。この点で、Chomskyを中心とした生成文法とは大きく違っている。この点について、大堀（2001）は以下のように述べて

いる。「構文文法は、複数の開発者が異なった立場から推進しているので、「万世一系」のものではない。FillmoreとKayが本格的な共同作業を進める一方、Lakoffは独自の関心を持って研究を行っており、構文文法は初期においてすでに－基本理念は共有しつつも－複数の方向性を持っていた（大堀2001: 528）。」「現時点では、構文文法は共通の基本理念のもとに進められている多方面の研究の集合体というべき状況にある（大堀2001: 530）」

(3) 'basic sentences of English are instances of *construction* －form-meaning correspondence that exist independently of particular verbs' （Goldberg1995: 1）.

(4) ただし、ある格パターンが単一の事態を表しているわけではない。また、事態の描き方には、動詞の意味特徴が強いものと構文の意味特徴が強いものがある。動詞の意味と構文の意味の関係は、概略以下のように捉えることができよう。

動詞の意味 ＞ 構文の意味 ： ［－ガ｛回る／壊れる／起こる…｝］

動詞の意味 ＜ 構文の意味 ： ［－ガ－ニ－ヲ｛送る／渡す／伝える…｝］

「－ガ V」というような格パターンでは、動詞の意味が大きな役割を占め、［－ガ－ニ－ヲ V］というような格パターンでは、構文の意味が大きな役割を占めると考えられる。早瀬（2002）は、「あまり生産性の高くない構文であれば、その構文スキーマよりも、その下位に位置する、具体的な動詞を伴った構文スキーマの方が、定着度も活性化の度合いも高いため、結果として「構文」そのものが生産性に果たす役割はそれほど大きくはないかもしれない。一方、新規表現を新しく類推に基づいて生み出すことが可能であるような、生産的な「構文」であれば、その構文スキーマはネットワーク上で十分に定着し活性化をうけることになるので、「構文」が文生産に果たす役割も大きいことになる（早瀬2002: 64）」と述べている。

(5) 本稿では触れられなかったが、森山（1988）は、構文文法とは異なる国語学的観点から格パターンに基づいた動詞の意味を研究したものである。森山（1988）の連語論的分析（「格パタン分析法」）は、「構造的にしばられた意味」という観点から、連語としての意味を設定するという方法をとっている。森山は、格のパターンも含めた総合的な動詞句としての意味を「連語的な意味」と呼んでいる。

参考文献

岩田彩志2001「構文理論の展開」『英語青年』第147巻.第9号, 531-535.

大堀壽夫2001「構文理論－その背景と広がり」『英語青年』第147巻.第9号, 526-530.

河上誓作(編･著) 1996『認知言語学の基礎』研究社出版, 161-176

国広哲弥1997『理想の国語辞書』大修館書店

早瀬尚子2002「構文解析の中核としての動詞－構文理論から見た動詞」『言語』Vol.31, No12, 58-65.

早瀬尚子2001「英語における形容詞コピュラ構文の一考察」『英語青年』第147巻.第9号, 541-543.

松本曜1997「空間移動の表現とその拡張」田中茂範・松本曜(編)『空間と移動の表現』研究社, 126-230.

松本曜2002「使役移動構文における意味的制約」西村義樹(編)『シリーズ言語科学２ 認知言語学 ：事象構造』東京大学出版会, 187-211.

宮島達夫1972『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

村木新次郎1991『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

森田良行1989『基礎日本語辞典』角川書店, 770-773

森山卓郎1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院

吉村公宏2002「構文(construction)」辻幸夫(編)『認知言語学キーワード事典』, 研究社, 75-76.

Fillmore, C., P. Kay and C. O' Connor. 1988. "Regularity and Idiomatical Grammatical Construction: The Case of *Let Alone*." *Language* 64: 501-538.

Goldberg, A. E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure.* Univ. of Chicago Press. (河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子訳. 2001. 『構文文法理論』研究社)

日本語辞書、及び、コーパス

『大辞林－第二版－』三省堂

『広辞苑－第五版－』岩波書店

『日本語語彙大系（CD-ROM版）』岩波書店

「佐賀新聞記事データベース」『佐賀新聞』(http://www.saga-s.co.jp/pubt2002/ShinDB/)